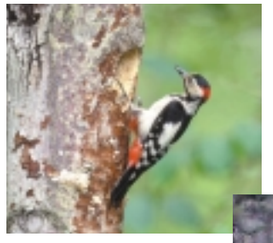
川湯温泉

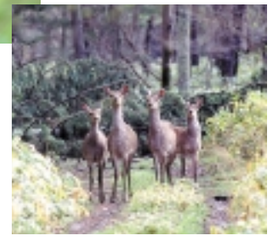
森の息吹とのどかな旅情

川湯温泉の熱源は硫黄山で、
温泉街には湯の川（セセクベツ）が湧き出している。
硫黄の香りといたるところに立ちのぼる湯煙。
浴衣姿の旅行客が、土産物店を眺めながらのんびり歩く。
そんな昔ながらの温泉情緒を醸す川湯温泉は
紅葉がとても美しい。名湯の誉れ高く、
群馬の草津温泉と同じ泉質といわれている。

川湯温泉街の硫黄泉は、摩周湖の伏流水が、磁気活動をする硫黄山の地下を通る際に熱せられたものと考えられている。湯の川園地には「セセクベツ」と呼ばれる湯の川がいく筋も流れ、風情豊か。



「川湯エコミュージアムセンター」を起点にして、「アカエゾマツの森（800m）」「アカゲラの小径（2km）」という散策コースがある。深い森の懐でアカゲラやクマゲラなどの野鳥に出会えるチャンス。



川湯温泉は、エゾマツやアカエゾマツの純森、そしてミズナラ・シラカバなどの広葉樹林に抱かれている。ホテル街から少し歩くだけで野生動物の息吹も。川湯では温泉＆森林浴散歩を楽しみたい。

素晴らしき森と、誉れの硫黄泉

川湯温泉街に入ると、宿々に掛けられた「かけ流しの宿」という大のれんが目にとまり、加水も加温もせず、自家源泉をそのまま掛け流す「源泉主義」の心意気に感じ入る。

湯は硫黄山の磁気活動によって自然湧出する硫黄泉である。泉質は酸性みょうばん泉で、ｐＨ（水素イオン濃度）1.7～1.9という日本屈指の強酸性温泉。その威力は、五寸釘を１週間で溶かし消すほどだというから驚いてしまう。温泉の成分・組成も優れており、総鉄イオンや硫酸イオン、ナトリウムイオン、アルミニウムイオン、カルシウムイオンなどを多量に含む高濃度の名湯を、ぜひ肌で感じてみよう。また、宿ごとに源泉の成分・組成が微妙に異なり、香りや湯触りもさまざまなことも興味深い。

昔、川湯の湯治客は、硫黄泉で刺激を受けた体を休めるため、最後に緩和性の温泉で「なおし湯」をして帰ったと言う。川湯温泉駅前周辺には重曹泉（ナトリウム-炭酸水素塩泉）が湧いているので、こちらへ寄ってみるのもおすすめだ。

川湯エコミュージアムセンター

周りの自然とひとつになって、
四季折々の川湯の魅力を教えてくれる。

エゾリス

弟子屈町北部に位置する、川湯温泉街。硫黄山を泉源とした硫黄泉を求め多くの観光客が訪れるが、川湯を訪れた際は、「川湯エコミュージアムセンター」をのぞいてもらいたい。

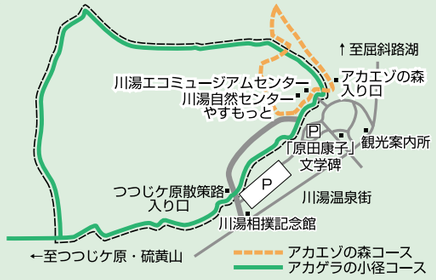
通称「もりのパレット」と呼ばれるこのセンターは、川湯の町と一体になった博物館だ。案内カウンターにはスタッフが常駐しているので、その時見られる植物や散策のおすすめコースなど、様々な質問に答えてくれる。館内には、屈斜路カルデラのなりたちを放映する「イメージジオラマシアター」や、川湯の自然や動植物を映像で紹介する「森のシアター」、約400冊の本を用意した図書など内容盛りだくさん。また、子供たちに人気なのが「ネイチャークラフトコーナー」。テーブルの上に木の葉や松ぼっくりが並べられ、スタッフに声をかけるだけでクラフト体験が楽しめる。

「もりのパレット」周辺には、アカエゾの純林を歩く「アカゲラの小径」（約2km）や、「アカエゾの森」（約800m）といった自然の散策路がある。「もりのパレット」では、散策のガイドも引き受けてくれるので、気軽に声をかけてみよう。

アカエゾの森

ゴジュウカラ

アカゲラの小径



川湯温泉旅館組合に所属する17軒の旅館でORP（酸化還元電位）調査・分布実地

川湯温泉旅館組合17旅館の浴槽については、温泉本来の状態である「還元系」が保たれており、温泉の本質が守られていることが明らかになりました。

①すべての旅館において浴槽と源泉の温泉水は同一であること。
②すべての浴槽は「かけ流し」で利用されていること。
③循環ろ過や塩素などが使用されていないこと。
④源泉、浴槽とも「還元系」という温泉の本質的な特徴が保たれていること。

川湯温泉の泉質は次の3種類に分類されます。

◇温泉街のPH1.66～1.91の強酸性泉
◇屈斜路湖畔にあるPH7.37～7.66と中性を示す単純温泉
◇駅前地区のPH7.21の中性を示す重曹泉